

年 組 名前:

「もふもふ」5割超に浸透

「失笑」違う意味で理解67%

文化庁 23年度国語世論調査



文化庁は17日、2023年度の国語に関する世論調査の結果を公表した。日常会話で使われる新しい表現の浸透合いをみる設問で、「動物などがふんわりと柔らかそう」との意味で「もふもふ」を「ゆっくり、のんびりする」の意味で「まったく」を、使う人はそれぞれ52・6%に上った。「時間や手間をかけない」を「さくさく」と言うのは56・2%だった。別の問いで、7割近い人が「失笑する」を本来と違う意味で理解していた。

文化庁は、新しい意味や使い方が辞書に記載され始めた言葉を調査。年代別では「もふもふ」を使う人は30代以下が8割を超え、60代でも4割いた。「まったく」は20〜40代が7割を超えたが、16〜19歳は61・4%だった。他人が使うのが気にならないとしたのは両表現とも8割を超えた。「ときめきを感じる」の表

「もふもふ」は、現で「きゅんきゅん」を使うのは41・4%。「筋金入りの」という意味で「こりこり」と言うことがあるのは20・0%で、他人の使用が気にならないとしたのも59・4%にとどまった。

慣用語や言葉の意味に関する設問では、「失笑する」を本来の「こらえ切れず吹き出して笑う」の意味ではなく「笑いも出ないくらいあきれ」とした人が67・0%に上った。「うがった見方をする」は60・7%が「疑って掛かるような見方をする」と回答。本来の「物事の本質を捉えた見方をする」は32・7%だった。調査は今年1〜3月に16歳以上6千人を抽出して実施。3559人から回答を得た。

感覚的表現 中高年も 東洋大の三宅和子名誉教授 (社会言語学) の話。新しい表現の普及には、交流サイト (SNS) といった、主に若者中心のインターネット文化が影響している。本来は切れ味や歯ごたえを表す「さくさく」とのように、感覚的・情動的で短い表現が好まれる特徴があり、若者の感覚的「ミニニケーション」が中高年まで広がっていることが分かる。ある程度の意味が伝わればよいという曖昧さも特色で、対立軸を明確にせず何となく共感できればよしとする社会の風潮にもつながっているのではないかと。

(2024年9月18日付 山梨日日新聞 19面)

問1 日常会話での新しい表現が増えています。「まったく」を使って簡単な文章を作ってください。

.....

問2 次の言葉の正しい意味を教えてください。

失笑する →

うがった見方 →

問3 新しい表現の増加や、間違った意味で使われることについて、あなたの考えを教えてください。

.....

.....